

氏 名	佐 藤 光
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学位記番号	文 博 第 175 号
学位授与の日付	平 成 13 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 英 語 学 英 米 文 学 専 攻
学位論文題目	“The voice of honest indignation is the voice of God”: Freedom from Oppression in William Blake (「誠実な怒りの声は神の声である」——ウィリアム・ブレイクにおける抑圧からの自由)
論文調査委員	(主 査) 教 授 宮 内 弘 教 授 豊 田 昌 倫 助 教 授 佐 々 木 徹

論 文 内 容 の 要 旨

本論ではウィリアム・ブレイク (William Blake) の作品のうち、『無垢の歌と経験の歌』(*Songs of Innocence and of Experience*) より「迷った少女」(“The Little Girl Lost”)と「見つかった少女」(“The Little Girl Found”)の二篇の詩と、『アルビオンの娘たちの幻想』(*Visions of the Daughters of Albion*), 『天国と地獄の結婚』(*The Marriage of Heaven and Hell*), 『四人のゾア』(*The Four Zoas*)をとりあげ、自由を希求する個人の前にさまざまな形で抑圧が立ちあがるとき、個人が解放されるために必要となる思想の力とはどのようなものであるのかを考察する。

第一章では、これまで多くの批評家たちによって論じられてきた「迷った少女」と「見つかった少女」を読みなおし、これらを“a return to Innocence”(Bloom)と解釈することの是非を検討しながら、「無垢」と「経験」との動的な関係からうみだされる「進歩」(“progression”)が、そのどちらにも還元できない新しい状態であることを明らかにする。

「迷った少女」では、両親のもとを去り孤独な旅を続けてついに「楽園」(“a garden mild”)に到達し、獅子や虎に囲まれながら安らかに眠っているライカ(Lyca)の様子が描かれている。この描写は、名づけるという特権的な行為を通してアダムが行なった、人間はすべての生き物の司であるという自己規定をライカが放棄し、支配と差別と抑圧のない状態に入ったことを示している。ライカは積極的に迷子になることによって、両親を「楽園」へ導こうとしている。

「見つかった少女」では、ライカの後を歩む両親の様子が語られている。静謐と調和に満たされたライカとは異なり、ライカの幸せな境遇を想像できずに自閉的妄想におびえている両親の様子は、“shadows deep” “fancied image” “pathless ways” “strays”などの一連の語句によって描き出されており、彼らが彷徨している「夜」とは自らの否定的な思考に胚胎した内的な闇であることが明らかにされる。彼らのかたくなな心は、柔和な獅子との遭遇によって打ち碎かれる。既成の「知識」の下僕になっていた彼らは、今やその主人となるべきことを知り、不安を克服してライカのいる「楽園」へと向かう。

詩の冒頭で語り手が予言した「楽園」の到来は、第三プレートの絵画テキストを見るかぎりでは成就したように見えるが、文字テキストによると、ライカとその両親がたどり着いたのは“a lonely dell”であって“a garden mild”ではない。絵画テキストにおいては共存共栄の楽園を描きながら、文字テキストでは“a lonely dell”を選択した語り手は、否応なく自分が巻き込まれてしまう共同体の論理に、自分の主義主張が衝突するときに生じる齟齬や背馳や挫折を、二種類のテキストを互いに撞着させることによって表現している。楽園に到達したライカとその両親は、そこに到達してしまったがために、18世紀の競争社会からはじき出され、孤独な生活を送らざるをえない。

彼らが最終的にたどりついた楽園は、アダムとイヴが暮らしていた楽園ではない。その違いは、彼らが「無垢」と「経験」の両者を通過したことに由来する。「無垢」か「経験」かという二者択一にとらわれて自滅するのではなく、それらとともに対象化したとき、彼らの目の前には二項対立を超越した新しい境地が開けた。ただしそれは、現実世界＝共同体からは隔絶された楽園なのである。

第二章では、『アルビオンの娘たちの幻想』をとりあげ、凌辱の犠牲者ウースーン(Oothoon)の主張に注目しながら、

その試行錯誤を同時代の社会状況とあわせて考察する。

プロミオン (Bromion) に凌辱されたウースーンは、当初、プロミオンによってはりつけられた「娼婦」というレッテルを素直に受け入れ、恋人セオトーモン (Theotormon) に対する贖罪の意志を表すため進んで肉体的責苦に身をさらす。しかし、やがてウースーンは、凌辱の被害者が凌辱の責任を負わなければならないという考え方に疑問を抱く。この過程は、抑圧された女性が自らが抑圧されていることを自覚し、その抑圧の原因が家父長制社会を支えるためのからくりにあったことを看破する過程である。女性の自立を阻む家父長制社会特有の婚姻制度と偏った女子教育の実情を擬似的な凌辱として語るウースーンの言葉は、『クラリッサ』(Clarissa), 『モル・フランダース』(Moll Flanders), 『トム・ジョウンズ』(Tom Jones), 『レイディーズ・マガジン』(Ladies' Magazine), 『結婚に関する考察』(Some Reflections upon Marriage) などの同時代の小説やエッセイにおける女権論者の主張を忠実に反映している。

この延長線上に、ウースーンの性的快楽に対する肯定的な発言があり、この発言自体が、女性が性について語ることをタブーとしている家父長制社会に対する反抗という意味をもつ。ウースーンは性を契機として、抑圧的な制度のなかに取り込まれてしまった男女の関係から社会性を脱色し、一人の男性と一人の女性の結びつきという本来の個人的な関係を復興しようとしているのである。

女性の尊厳を主張するウースーンは、奇妙なことに、作品の最終部分でセオトーモンのためにハーレムを建設することを提案する。家父長制の抑圧的な側面を指摘してきたウースーンが、なぜこのような奇怪な発言をするのか。

従来この矛盾は、作者である男性ブレイクの潜在的欲望の表出として、あるいは、メアリ・ウルストンクラフト (Mary Wollstonecraft) の伝記的事実に取材したものとして説明されてきた。本章では、男女の結合の絆を双方の意志におこうとするウースーンが「寛大な愛」を強調するあまり、それが女性に献身と自己犠牲を強いる口実となりうることを見落としてしまったのだ、と考えたい。ウースーンは、性の自由が互惠的でない、つまり、セオトーモンの性の自由はウースーンによって容認されていても、ウースーンの性の自由はセオトーモンによって容認されていないという意味において、ウースーンによるウースーン自身の抑圧が含まれている。家父長制の問題点を指摘するウースーンがはからずも演じてしまったのは、制度的抑圧からの解放を求めて性の自由を提唱した女性が、まさにその性の自由によって個人的抑圧のなかへからめとられてしまうという悲劇であった。

第三章では、『天国と地獄の結婚』のなかから「地獄の格言」をとりだし、知覚・認識の主体性に関する議論について考えながら、語り手が選択した表現手段の工夫とその効果を旧約聖書「箴言」と対比させて論じる。

「地獄の格言」と旧約聖書「箴言」には、レトリックや語彙において明らかな類似が認められることはこれまで指摘されてきたが、このような類似は、両者の思想上の対照をむしろ強調するものでもあり、「神」という概念の処理の仕方、「知恵ある者」と「愚か者」という対比の作り方、格言の配列の仕方の三つの側面において、両者は決定的な相違を呈している。神を指す単語として“LORD”を主に用いている旧約聖書「箴言」が、神と人との関係を主従関係と位置づけ、「主を畏れよ」という教えを軸に一貫した規範を記述しているのに対し、「地獄の格言」では神を指すのに“God”のみを用い、相互矛盾をおこした格言を収録している。つまり、「地獄の格言」による箴言のパロディーは、矛盾の提出という方法によってこそなされているのであり、そこに読者の思考を活性化するための積極的な工夫が存在する。「地獄の格言」は、その脈絡の無さゆえに、善悪に関する物語としての教典を相対化する装置と化しているのだ。読み手の多角的な解釈を誘発する「地獄の格言」は、曖昧な格言の解釈を読み手の自由な判断にゆだねるというまさにそのことによって、知覚・認識の主体性を個人の内部に取り戻すための一つの仕掛けとして機能している。すなわち、首尾一貫した物語性を拒否することによって、善悪の物語である“All Bibles or sacred codes”が決して絶対的なものではないということを訴えると同時に、価値判断の拠り所を読み手がそれぞれの自主的な作業によって構築することを、「地獄の格言」は促しているのである。

語り手のこうした態度は、「地獄の格言」の絵画テキストによって逆説的に補強されている。活字を思わせる書体とページの最上部に配置されたヘッダーは、明らかに「公教要理書や教科書」を意識したものであり、教典化作業のパロディーといつてよい。ここに示されているのは、教典を製作するのに用いられたアルファベット、つまり活字という交換可能な部品をそのまま組み換えることによって、全く内容と性質の異なる教典が編纂されていたかもしれないという可能性であり、ありえたかもしれない教典のあり方を提示することによって、これまで「真理」として信じられてきたものを批判的に点検す

る視座が提供されているのである。

また、一つの作品を締めくくるのに通常用いられる“The End”や“Finis”ではなく、“Enough! or Too much”という否定的な言葉で閉じられた「地獄の格言」は、自らが教典化されることを拒絶しており、受動的な読者から能動的な読者へと読み手を変容させるための触媒の働きをしている。解釈するという行為が成立するためには、認識の主体性が自己の内部に確立されていなければならないことを思えば、「地獄の格言」が要求する解釈作業への読み手の積極的な参加は、外部から倫理コードを強制されるのではなく、価値判断の主体性を個人の中に確立しようとする語り手の主旨に合致している。

第四章では、『天国と地獄の結婚』の諷刺の標的には『天路歷程』(*The Pilgrim's Progress*)も含まれているのではないかと、という説を提案する。これらの二つの作品を、(1)『天路歷程』における「解釈者氏」(Interpreter)と「クリスチャン氏」(Christian)の対話と『天国と地獄の結婚』における「天使」と語り手「私」との対話、(2)『天路歷程』におけるアポリオン(Apollyon)と『天国と地獄の結婚』におけるリヴァイアサン(Leviathan)、(3)『天路歷程』における「まっすぐな道」の強調と『天国と地獄の結婚』における「曲がりくねった道」の強調、という三点に関して比較すると、『天路歷程』の世界観が相互排他的な善悪二元論であることと、『天国と地獄の結婚』の攻撃対象が「正解」をフィルターにした殺菌消毒のメカニズムであることが見えてくる。

本章の後半では、これらの二つの作品の比較を通してブレイクとジョン・バニヤン(John Bunyan)との関係を考察する。『天路歷程』に付けた挿絵において、ブレイクは、天国に所属するはずの「伝道者氏」(Evangelist)と「善意氏」(Good Will)を、地獄に所属するはずの「世俗的智者氏」(Worldly Wiseman)とほとんど同じ人物像として描き出している。この奇妙な一致が暗示するものは、ある権威に従属して思考停止に入るという点では「伝道者氏」に従おうが「世俗的智者氏」に従おうが同じである、というブレイクの見解であろう。ブレイクにとってバニヤンとは、反律法主義を説き、ある特定の個人や団体によって管理されることのない魂の自由を主張しておきながら、「伝道者氏」や「善意氏」や「輝ける者」(a shining One)を審判者とする新たな聖職者組織(“Priesthood”)を作り上げてしまった誤れる預言者なのである。

敵対者を“abhor”し“hate”することを説く『天路歷程』とは異なり、『天国と地獄の結婚』の語り手「私」は敵対する「天使」を“My friend the Angel”(MHH, E41)と呼ぶ。対立や混乱こそが思想を鍛えてゆくもとなるのだという考えが、『天路歷程』のパロディーとしての『天国と地獄の結婚』には埋め込まれているのである。

第五章では、『四人のゾア』に描かれたユリゼン(Urizen)に注目し、産業革命の推進力となった合理主義思想がブレイクにおいてどのように扱われているかを検討する。

イギリスの象徴とされる巨人アルビオン(Albion)の上で、四人のゾア(Zoa)と呼ばれる神話的人格が主導権をめぐって互いに争っている、という設定で物語が始まる。争いに疲れ果てたアルビオンは、合理主義の権化として登場するユリゼンに、調停するための権限を委ねる。だが、ユリゼンはその権限を利用して自分が支配者として君臨する世界を作り上げてしまうのであり、その世界とは、極端な合理主義に侵された当時のイギリス社会をブレイク流に語り直したものである。

ユリゼンの世界を描写するのに語り手が用いている言説を分析すると、同時代の救貧法をめぐる論議や工場の非人間的環境に関する告発が、そこに含まれていることがわかる。語り手はこれらを合理主義の無反省な適用の結果とみなし、そのありようを、ユリゼンを神とし教祖とする宗教というかたちで描き出す。つまり、18世紀のイギリス社会とは、語り手によれば、非合理的な合理主義が君臨する世界であり、合理主義そのものを批判的に見つめなおすということの禁じられた思考停止の社会なのである。

では、語り手は合理主義を不要と考えているのだろうか。物語の最終部には、ユリゼンが自らのあやまちを悟り、生まれかわるという場面が書きこまれている。語り手は、たとえば「感性」を尊重して「理性」を否定するというような二律背反的な判断をしているのではない。語り手は、効率重視を旨としたために多くの問題を引き起こしている合理主義も、適度な均衡さえ保てば人間社会にとって有益なものである、という見解を示しているのだ。『四人のゾア』を“The dark Religions are departed & sweet Science reigns”という言葉で締めくくった語り手は、合理主義の再生に未来を託しているといえる。

以上の議論を踏まえて、ブレイクの思想の一端を形成しているものとして、「変化」「批判精神」「個人の感情」という三つの鍵言葉を結論として提出する。「迷った少女」と「見つかった少女」は、預言者的存在のライカが彼女の両親の世界観

に「変化」をよびおこす物語であり、その「変化」の結果として生じた共同体からの疎外が、作品の主要なテーマであった。これに対して『アルビオンの娘たちの幻想』は、同じような預言者的存在のウースーンが個人の価値観のなかに「変化」を起こし、それを手がかりにして新しい自由な世界を作り上げようとして挫折する話である。ここで明らかになったのは、個人の内面に深く食い込んでいる社会的制度の催眠的な力の存在であった。『天国と地獄の結婚』に含まれる「地獄の格言」は、そのような自己催眠からどのようにすれば自由になることができるか、ということを示す一つの例題である。この作品からは、絶対的なものを相対化するための手法と、そうすることによって得られる「批判精神」の重要性を読みとることができる。パニヤンの『天路歷程』は、この「批判精神」の欠如ゆえに、ブレイクの攻撃対象となった。最後に扱った『四人のゾア』に登場するユリゼンの魂の変遷は、ある存在が「変化」を拒絶するとき、どれほど抑圧的な性質を帯びるかということと、「批判精神」を身につけたとき、どれほど自由な存在になることができるか、ということを明瞭に示している。

ただし、このような「変化」と「批判精神」はある特定の思想体系に準拠して達成されるものではない。ブレイクにあっては、「変化」と「批判精神」の源は「個人の感情」のなかにある。抑圧的な制度にからめとられそうになったときに個人の内面において発生する強い違和感こそが、「変化」と「批判精神」を支える基底であり、社会制度を変革する原動力となるのである。この過程は『アルビオンの娘たちの幻想』に登場するウースーンの声のなかに最もはっきりと描かれている。

抑圧からの解放という観点からブレイクの思想を考察してきたが、「変化」と「批判精神」に対して肯定的な価値を付与する姿勢と、両者を支える根拠として「個人の感情」が重視されていること、そしてこれらを読者に対して効果的に訴えかけるために、文字テキストと絵画テキストが巧みに使用されていることを指摘して本論の結論とする。

論文審査の結果の要旨

本論文は、18世紀の神秘的詩人で銅版画家であったウィリアム・ブレイクの作品のなかから、『無垢の歌と経験の歌』より「迷った少女」と「見つかった少女」の二篇の詩と、『アルビオンの娘たちの幻想』、『天国と地獄の結婚』、『四人のゾア』をとりあげ、抑圧からの解放というテーマが、それぞれの作品においてどのようなかたちで表現されているかを論じている。

本論文の特色は、1) 当時の関係資料を駆使しながら、精緻なテキストの読みに基づいて手堅い論証を行っていること、2) ブレイクの先行研究に充分目配りしながらも既成の説に安易に従うのではなく、問題点を見極めた上で、それらに独自の視点から新たな解釈を施していること、3) 絵画テキストがある場合、積極的にそれを取り入れて、従来の文字テキストに基づく解釈に再検討を加えていること、4) テキストの矛盾を無理に解決するのではなく、矛盾を矛盾として受け入れて、そこから問題点に鋭く切り込んでいることなどである。

まず第一章では、『無垢の歌と経験の歌』に収録された「迷った少女」と「見つかった少女」に関して、ハロルド・ブルームが主張するように「無垢への復帰」と解釈するのではなく、「無垢」と「経験」という二つの状態の動的な関係からうみだされる「進歩」に着目し、「無垢」と「経験」のどちらにも還元できない新しい状態がこれらの詩において描き出されていることを明らかにしている。ブレイクの弁証法的思考法を考慮に入れば、妥当な結論である。さらに興味深いことに論者は、従来の研究では見逃されてきた、「見つかった少女」の絵画テキストと文字テキストの食い違いに着目し、この詩には、18世紀英国社会の調和を尊重する個人の世界観と競争を重視する共同体の論理との衝突の結果、個人が共同体からはじき出されていく過程が描き出されていると結論づけている。

第二章では『アルビオンの娘たちの幻想』をとりあげ、凌辱の犠牲者ウースーンの主張と彼女の試行錯誤を18世紀英国の社会状況と関連づけて論じる。この作品の最終部分において、女性の尊厳を主張するウースーンが彼女の恋人に対してハーレムの建設を提案するという矛盾が見られるが、この矛盾に関して論者は、ウースーンが「寛大な愛」を強調するあまり、彼女の提案が女性に献身と自己犠牲を強いる口実となりうることを見落としてしまったからだと説明する。家父長制の問題点を指摘するウースーンがはからずも演じてしまったのは、制度的抑圧からの解放を求めて性の自由を提唱した女性が、まさにその性の自由によって個人的抑圧のなかへからめとられてしまうという悲劇であったというのである。従来の伝記的事実に基づいた解釈とは異なった説として注目できよう。

第三章では、『天国と地獄の結婚』に含まれる「地獄の格言」を、知覚・認識の主体性の回復という視点から、旧約聖書「箴言」と比較しながら、そこで行なわれている表現上の工夫とその効果について論じている。「神」の記述の仕方、「知恵

ある者」と「愚か者」との対比の示し方、格言の配列の仕方の三点に関して旧約聖書「箴言」と「地獄の格言」を比較すると、「箴言」では「主を畏れよ」という教えを軸に一貫した規範が記述されているのに対し、「地獄の格言」ではそれぞれの格言が相互矛盾をおこしていることが明らかになる。論者は、「地獄の格言」による「箴言」のパロディーは矛盾の提示という方法によってなされていると考え、そこに読者の思考を活性化するための積極的な工夫を読みとろうとする。つまり「地獄の格言」は、教典に記された内容を鵜呑みにするのではなく、知覚した現象を自分で自由に判断して行動することを読者に推奨する、と解釈するのである。説得力のある鋭い指摘である。さらに論者は、活版印刷に関する研究を援用しながら、「地獄の格言」における伝達手段と伝達内容との間の関係を明らかにすることによって自説を補強している。本章は論者が最も力を入れて書いた部分で、学会誌にも発表され、その手堅い手法と独自の解釈は高い評価を得た。

第四章では、ブレイクの『天国と地獄の結婚』とバニヤンの『天路歷程』の関係を論じる。まず論者は二つの作品の類似性や影響関係を詳細に論証した後、『天路歷程』の世界観が善悪二元論であることを指摘する。次に論者は、ブレイクにとってバニヤンとは、反律法主義を説き、ある特定の個人や団体によって管理されることのない魂の自由を主張しておきながら、相互排他的な善悪二元論を信じ、新たな聖職者組織を作り上げてしまった誤れる預言者であったとし、『天国と地獄の結婚』は『天路歷程』のパロディーではないかという説を提唱する。

第五章では、『四人のゾア』に描かれたユリゼンに注目し、合理主義思想がブレイクにおいてどのように扱われているかを検討する。まず論者は、語り手がユリゼンの世界の一部として記述するもののなかに、合理主義によってもたらされた非人間的環境に関する告発が含まれていることを指摘する。また一方で、ユリゼンが自らのあやまちを悟り生まれかわるという場面では、健全な合理主義ならば人間社会に大きな貢献をするだろう、という合理主義に対する期待を読みとる。つまりこの作品で批判にさらされているのは、合理主義そのものではなく、合理主義を無反省に適用するという態度なのである。従って論者は、従来よく言われているように「感性」が「理性」より優位に立つという図式では、ブレイクの思想を説明することができないとし、ブレイク哲学において重要なのは、「感性」と「理性」の緊張の上に成り立った均衡である、と主張する。

以上見てきたように、本論文は、先行研究を充分踏まえ、問題点を明らかにした上で、それらに対して独自の解釈を打ち出し、日本のブレイク研究に新たな視点を提供した点で高く評価できる。また論旨も明快で論証もおおむね妥当なものである。しかし問題点が全くないわけではない。個々の章を独立して読むと気づかないが、全体を通して読むと、議論の展開がいささかパターン化しているように思われる。また論者は文字テキストだけでなく絵画テキストの重要性にも注目して、それを積極的に解釈に利用しているが、絵画テキストは文字テキスト以上に曖昧である場合も多く、恣意的解釈に陥る危険性があることにも留意すべきであろう。例えば第四章で三人の人物が同じように描かれていると論者は主張しているが、見方によれば異なっていると思われる部分もあり、論者の主張を裏付ける確固とした根拠に欠ける。また同じ章でバニヤンの排他的な善悪二元論をブレイクが諷刺の対象にしているという説をうちだしているが、国教会を強く批判し、権力に反抗しながら説教し続けたバニヤンに対してブレイクが少なからぬ共感を覚えていたことなどを考慮すると、この説はやや強引すぎるように思われる。

しかしこれらの点も難解なブレイクの詩作品の解釈に示しえた新たな知見に比べれば小さな欠点にすぎず、本論文の学術的価値を揺るがすものではない。

以上を審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2001年2月6日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。